

韓国における若者の「自意識」と親子関係

—韓国の親子関係と若者の自立への葛藤に注目して—

尹 珍 喜*

Young Adults' Independent Consciousness and the Parent-Child Relationship in Korea

— A Focus on the Parent-Child Relationship and the Conflict for Independence —*

YOON Jin Hee

Abstract

In recent Korean society, independence for young adults has become a topic of discussion in the society as well as individual lives. Prior research shows that the Korean young adults' independence affects the parent-child relationships because it is said that the attachment among parents and the child is very strong in the Korean society. The purpose of this study is to examine the relation between young adults' independent consciousness and the parent-child relationship in Korea. I investigate How young adults experiencing various social changes recognize the relationship with their parents, and how their independent consciousness is affected by family standards. I performed a focus group interview on unmarried males and females ages 25-35 who were living in Seoul and Gyeonggi-do, Korea in 2006. I obtained the following results : Males thought that they must answer their parent's expectations economically, whereas females felt the need for emotional intimacy from their parents until marriage. The rise in the unemployment rate has increased the internal conflict for males, whereas social advance of females has heightened the internal conflict for females.

Key words : Pre-marital Young Adult, Independence, Parent-Child Relationships, Conflict, Korean society

1. 問題の所在

現代社会では、若者層の失業問題、ニートやフリーターといった職業問題、あるいは若者の晩婚化・非婚化など若者層における社会的な問題が注目されている。欧米では、80年代から「ポスト青年期」に関する論議が始まり、青年層の就職難、ライフスタイルの変化、晩婚化によって、成人期への移行が順調に進まない若者に焦点を当て、シティズンシップの獲得に注目して研究が行われてきた (Jones 1992 [=1996])。

一方、日本の研究では、90年代に入ってから若者の青年期から成人期への移行が注目されるようになった。宮本ら (1997) は、子ども世代の高学歴化による就職時期の遅れ、未婚化と晩婚化、また、健康でありながら長期にわたり安定的な経済力を持続する親世代が成人子を経済的に支援し続けるようになったことを指摘した。同時に、このような若者を「パラサイト・シングル」と呼んで若者の自意識の低さを批判する論者もいた (山田

キーワード：成人未婚者、自立、親子関係、葛藤、韓国社会

*平成18年度生 ジェンダー学際研究専攻

1999)。しかし、最近では、フリーターやニートが社会的に大きな問題になることによって、若者の自立は、個人の問題であるより、労働市場の変化、雇用問題、住宅問題といった社会環境要因が強く作用しているという見解の研究が増えている（乾 2002：武石 2002：田中 2002）。

韓国社会で、若者の自立問題が注目されるようになったきっかけは、学業を終えて経済活動を始める若年層における失業率の急速な増加にある。韓国の「青年失業率」⁽¹⁾は、1997年10月IMF 経済危機を迎える以前は、4.5%～5.5%を維持していたが、1998年から12.2%に急増し、この10年間は8%程度である（韓国統計庁 2007）。しかし、現在就職活動をしている者を対象に測定する失業率は、就職のために試験を準備している「就業準備者」や以前就職活動を行ったが就活する意欲を失った「求職断念者」⁽²⁾などは含まれていないため、実際の青年失業率は20%に至ると推測されている（Cho 2005）。また、若年層就職者の3割以上が臨時・パートなど非正規労働者であり（韓国統計庁 2007）、彼らの月平均給与額が88万ウォン（約8万円）であることから、20代の非正規労働者は「88万ウォン世代」と呼ばれている（Woo他 2007）。このような若年層における雇用問題は、若者が新しい家族を維持できる経済力を持っていないため、結婚率を低下させる一つの原因になっている（Cho 2005）。

また、韓国社会でも日本と同様に、学業を終えても親の経済力に依存する「カンガルー族」、一度親から独立した後、経済的な困難にぶつかって親元に戻る「ブーメラン族」など、大人になっても親に経済的に依存する若者が増えている。このような社会現象は、韓国親子関係の特徴から理解することが重要である。韓国の親は子どもに対する期待が非常に高く、自分の人生を犠牲にして子どもへの支援を惜しまないことが特徴である（Park & Lim 2003）。また、子どもに対する親の過剰な干渉や愛情は、若者の情緒的自立を妨げる要因であると指摘されている（Min 1996）が、一方、子どもの親に対する適切な愛着心は、若者の進路決定に肯定的な影響を与えるという研究もある（Kang & Park 2001）。日本の研究で米村（2008）は、親子が一定の距離を保つことが若者の自立意識を高めること、子どもの自立に対する親の強い希望は、若者にとって負担になり自立を拒む要因として働くことを指摘している。

一方、若者の自立においてジェンダー間の違いが見られる。青年期ではジェンダーに応じてそれぞれ異なる大人へ社会化がなされる時期として期待される（岩上 2003）。息子の場合、「男」としての自我の確立を目指して母親から分離し、そこから社会化されていくとされているが、娘の場合には母親と自分自身が同性であるため、分離は曖昧なままであるとされた（中西 2004）。韓国の研究では、女性よりも男性の方が親の愛着に対してより肯定的な態度であり（Lee他 2004）、女性の方が、親子のコミュニケーションから受けるストレスがより高い（Kim & Lee 1997）。また、尹（2007）の研究では、経済的自立、情緒的自立、生活的自立のすべて自立において女性よりも男性の方が高い得点を示した。このような親子関係や自立における男女差が生じる原因の一つは、韓国ではまだ「家父長」的な思想が根強く残っているため、息子と娘によって親から期待される自立の内容が異なるのではないかと考えられる。しかし、近年の韓国社会は超高学歴化社会を迎えて男女の学歴差と社会進出における男女差が縮まる傾向が見られる。2006年の大学進学率は、男性82.9%、女性81.1%で、ほとんど男女差が見られなくなった（統計庁2006）。また、経済活動人口（就業者と失業者を合わせた人口）を見ると、2007年では男性の74.8%、女性の50.2%が経済活動を行っていることから女性の半数が社会進出のために行動を行っていることが分かる。このような女性の社会進出によって親子関係にも何らかの変化が起きているのではないだろうか。

2. 本研究の目的

既存の研究では、ほとんどの研究が量的調査に基づくものであり、研究者が定義した自立概念に基づき、その規定要因を分析したものであるため、対象者である若者自身における自立概念や現代社会における自立の問題点を引き出すことができなかった。本研究では、韓国における若者の「自立意識」と親子関係との関連を検討することを目的とする。具体的には、様々な社会的変化を経験している若者は、親子関係をどのように認識しているのか、また、その認識は自立意識にどのような影響を与えているのかを検討する。特に、成人期における若者は、親からの様々な分離が課題となっていることを考えると、親子の強い密着が特徴である韓国社会では、若者の自立をめぐる親子関係が様々な葛藤を及ぼすと予想される。

日本の若者の自立との関連で示唆ができる点から、現代韓国社会で注目されている、若者の就職難から生じた経済問題、非婚・晩婚からする家族形成問題を親子関係との関連から検討することは大事な視点であると考えられる。

3. 調査概要

今までの先行研究では、研究者側が自立の基準を定義し、若者の自立と関連する要因を設定し、モデルを作成した後、その規定要因の影響を確認するという量的な研究方法をとっていた。しかし、当事者により語られる自立の経験からは、若者が認識している自立概念や、若者が抱えている自立への問題点をより詳細に提示できると思われる。本研究では、自立の「定義」や親子関係の構造を研究者側が設定して行う構造的インタビューをすることにより、当事者の自由な語りから自立の内容や親子関係の構造を引き出すことを目的とした。そのため、対象者同士が主体となりディスカッションを進め、参加者同士のやり取りや発言が刺激となって、他の参加者の発言を促し、1対1の面接では得られない幅広い考え方、態度、価値観、社会的文脈などの情報を得られる、Focus Group Interview (以下、FGI) を用いた (千年 2000)。

調査は2006年9月、韓国のソウルと京畿道^{キョンギド}の首都圏で居住している成人未婚男女を対象に行った。対象者選びは、筆者の知人から紹介してもらった対象者を基に、さらに対象者を紹介してもらう snowball方式を選んだ。グループを分ける際、親との同居・別居は若者の自立度に大きな影響を与えること、また、韓国の男性・女性は求められる自立の内容が異なる (尹 2007) という先行研究の結果を考慮し、「居住状況」と「性別」の2変数を基準にしてグループを分けた。つまり、親と別居している男性5人(以下、親別居男性グループ)、親と同居している男性5人(以下、親同居男性グループ)、親と別居している女性3人(以下、親別居女性グループ)、親と同居している女性3人(以下、親同居女性グループ)で、4グループに分けてデータを収集した⁽³⁾。

4. 対象者の基本属性

インタビュー資料の分析に先立ち、4グループの属性について簡単に説明する (表1参照)⁽⁴⁾。

「親別居男性グループ」は、地方出身者が多く、アルバイトをしながら就職のために資格を得る勉強をしている者がほとんどであった。そのため、現在の生活水準は「中下」であると答えた人が多い。「親同居男性グループ」は、全員が正規雇用として就職をしていたが、年収を見ると、5人中3人が100~200万円であったため、現実的に親から独立して暮らすほどの経済力を持っていないと思われる。「親別居男性グループ」が生活水準を記入する際、親の生活水準よりも低いと答えたことに対して、「親同居男性グループは」、親の生活水準とほぼ同じであると答えた。「親別居女性グループは」3人とも中学校の教師で、年収が200~300万円であるので、比較的安定的な経済生活ができると推測される。現在親と別居している理由は、全員が勤務地と実家との距離が遠いためであると答えた。「親同居女性グループは」、3人中2人がアルバイト、契約社員であり、年収も100万円未満、100~200万円である。しかし、自分の生活水準を親と同じ水準である「中」と答えることから、親と同居している者は、現在の経済力よりも親と暮らしている生活水準で自分の生活水準を判断していると推測できる。

5. 分析

4グループのFGIの会話では、若者が自立について語る際、「就職」、「離家」、「結婚」といったイベントとともに「親からの情緒的分離」、「意思決定能力」、「自分の人生に対する自己権限」といった内面的な側面が含まれていた。そして、自立についての悩みや葛藤が多く見られたが、その悩みの多くは、親子関係と関連していることが確認できた。特に、男女によって親子関係からのプレッシャー、自立への葛藤、結婚と親扶養に対する考え方が大きく異なっていた。上記の理由から、本稿では、男女に分けて若者が認識している親子関係と自立をめぐる葛藤に注目して分析を行う。

<表1> 対象者の基本属性

名前*	性別	兵役	年齢	学歴	職 業	年収入**	親の健在	きょうだい関係	生活水準 (親の生活水準)	居住地	居住状況 (親との居住距離)
M1さん	男性	終了	32歳	大学院	パート・アルバイト	100万円未満	母親のみ健在	妹1人	中下(中下)	ソウル	親と別居(2時間)
M2さん	男性	終了	29歳	大学	パート・アルバイト	100万円未満	両親とも健在	弟1人、妹1人	中(中)	ソウル	親と別居(5時間)
M3さん	男性	免除	28歳	大学院	大学院生	なし	両親とも健在	兄2人、姉2人	下(中)	ソウル	親と別居(5時間)
M4さん	男性	終了	27歳	大学	パート・アルバイト	100万円未満	両親とも健在	弟1人	中下(中)	ソウル	親と別居(2時間)
M5さん	男性	終了	27歳	大学	パート・アルバイト	100万円未満	両親とも健在	姉2人、弟1人	中下(中)	ソウル	親と別居(4時間)
M6さん	男性	終了	33歳	大学	会社員(正規)	200~300万円	母親のみ健在	兄1人、姉2人	中(中)	ソウル	親と同居
M7さん	男性	終了	31歳	大学	会社員(正規)	100~200万円	両親とも健在	姉1人	中上(中上)	京畿道	親と同居
M8さん	男性	終了	30歳	大学	会社員(正規)	300~400万円	両親とも健在	妹1人	中上(中)	京畿道	親と同居
M9さん	男性	終了	26歳	短大	会社員(正規)	100~200万円	両親とも健在	弟1人	中上(中上)	京畿道	親と同居
M10さん	男性	終了	25歳	短大	会社員(正規)	100~200万円	母親のみ健在	姉2人	中(中)	ソウル	親と同居
F1さん	女性	—	27歳	大学院	中学校教師(正規)	200~300万円	両親とも健在	姉1人、弟1人	中(中)	京畿道	親と別居(1時間)
F2さん	女性	—	26歳	大学	中学校教師(正規)	200~300万円	両親とも健在	姉1人、弟1人	中(中)	京畿道	親と別居(1時間半)
F3さん	女性	—	26歳	大学	中学校教師(正規)	200~300万円	両親とも健在	姉1人、妹1人	中(中上)	京畿道	親と別居(1時間半)
F4さん	女性	—	30歳	大学院	音楽治療師 (パート・アルバイト)	100万円未満	両親とも健在	兄1人、姉1人、 妹1人	中(中)	ソウル	親と同居
F5さん	女性	—	29歳	大学	高校教師(正規)	200~300万円	父親のみ健在	一人っ子	中(中)	京畿道	親と同居
F6さん	女性	—	29歳	大学	中学校教師(契約)	100~200万円	両親とも健在	弟1人	中(中)	京畿道	親と同居

*名前のMは男性、Fは女性を意味している。

**対象者には、年収入を「ウォン」で記入してもらったが、筆者が「円」で換算した値を記入した。

1) 男性の場合

a. 「就職」と「結婚」に対する親の期待

男性グループでは、自立について語る際、「就職」、「結婚」、「親扶養」といった内容を中心に会話が行なわれた。彼らは上記の内容を、親から分離する、または、役割が逆転することによって親から（または、社会から）成人として認められるイベントであると認識されていた。さらに、彼らの語りでは、就職による「経済力の獲得」、結婚生活が維持できる「経済的能力」、親を扶養できる「経済的能力」といった「経済的な側面」が強調されていた。特に、親別居男性グループでは、ほとんどがパート・アルバイトをしている者であったため、就職への親からのプレッシャーが多く語られた。次は、M4さんの語りである。

「我が国は、出世志向的な考えがあると思います。だから、(親は、子どもが)高収入(が得られる仕事)や地位の高い職に就くか、司法試験に受かるか、必ず(子どもを)出世させなければならないということをしごく考えるみたいです。…だから、教育熱もとても高いし、子どもに対する支援もすごく長いと思うんですね。」(M4さん、親別居男性グループ)

M4さんの語りでは、子どもが高収入を得るか地位の高い職に就くなど、子どもの「出世」に対する親の期待が大きい。また、このような親の期待は、子どもに対する「高い教育熱」、「長い支援」につながっていると考えられる。息子の「出世」に対する親の過剰な期待は子どもにプレッシャーになる場合がある。次は、M2さんの語りである。

「普通に親はそうです。私が教会を立ち上げるとしても、親は我が息子はより大きな教会を立ち上げてほしいと。だから、能力社会(で子どもが生きること)を思っているよ、親は。もちろん、それが(子どもを考慮)親の気持ちだというけど、実際は、子どもの自立を一次的に妨げる出世志向主義…」(M2さん、親別居男性グループ)

M2さんは、現在、牧師になるための勉強をしていて、将来、自分の教会を立ち上げることを目標としている。しかし、彼は、自分の願望とは別に、「より大きな協会」を願う「親の期待」を認識していて、それを「自立を一次的に妨げる」原因として位置付けている。また、「高収入を得る職業」、「地位の高い職種」、そして「より大きな教会」という言葉から、M4さんとM2さんは親から主に経済力の獲得を期待されていることが推測できる。子どもの経済的成功に対する親の過剰な期待は、子どもにとってプレッシャーになっていると考えられる。

一方、親同居男性グループは、「結婚」に関する親の期待へのプレッシャーを中心に語る傾向が見られた。それは、親同居男性グループでは、正規職で就職している者がほとんどであるため、親の関心や期待が「結婚」に移行しているのではないかと推測できる。次は、M7さん、M6さんの語りである。

「今、私達の年に共通的な話題がそうです。親から「結婚しなさい」と(言われること)。だから、一緒に暮らしても、離れて暮らしても(構わないから)、とにかく結婚しなさいって。」(M7さん、親同居男性グループ)

「親が考える自立の基準は…特に、男性は結婚をしてこそ大人になる、自立したと認めてくれるみたいです。」(M6さん、親同居男性グループ)

F5さんの語りからは、早く結婚することを願う親の期待にプレッシャーを感じていることが読み取れる。このような、結婚に対する親の期待は、彼だけの悩みではなく、同じ年頃の人には共通の話題になっている。M6さんは、このような親の期待を、「男性は結婚してこそ大人になる」のが「親が考える自立の基準」であると解釈している。親にとって、就職して経済力を獲得した子どもが完全に自立した大人になるきっかけは「結婚」して新しい家族を形成することであると考えられる。

このように、男性グループでは、「就職」と「結婚」に対する親の期待に若者がプレッシャーを感じていること

が確認できた。

b. 「孝思想」意識

男性グループの会話では、子どもの「就職」や「結婚」への親の期待に対して負担を感じつつ、親の気持ちを理解し、親の期待に応えるべきという姿勢が多く見られた。このような若者の態度は、韓国社会の親子関係の特徴である、親を敬い、親がいつも幸せを感じるように子として「ドリ（本分）」を尽くすという「孝思想」の視点から理解する必要がある（Park 2007）。「孝思想」は、親が自分を産んでくれたことへの恩恵（生産）、そして、育ててくれた恩恵（養育）に対する恩返しの気持ちであり、親を尊敬し、一生大事にする気持ちでもある。しかし、自立期の若者においては、親を「敬う」気持ちと自己意思決定の間で混乱が生じる場合がある。以下は、M2さんとM1さんの会話である。

M2さん：わが国の慣習上、年長者を敬う態度のこと。一度、(親に) 尋ねるのが礼儀で、わが国ではそれを礼儀だと思うんですよ。

M1さん：いや、違う。自立しているなら親の意見を尊重しても決定的には、決定的な瞬間では自分の意思を押し通すよ。私の考えではそれが自立だよ。自立していない状態なら(親子と) 意見衝突がある場合、結局、最後は(親の意見に) 合わせるようになるから。(親別居男性グループ)

M2さんは、自己決定を行う際、まず親に相談するのが「礼儀」として大事であると語っていた。つまり、自ら意思決定を行う行為において親の意見を反映することは、自立とは関係ない子どもとしての「ドリ」であると認識している。それに対して、M1さんは、自己決定をするとき、「親の意見を尊重する」気持ちと「自分の意思を押し通す」行為は別のものであると認識している。つまり、親を敬い意見を聞くことは重要であるが、最終的に決定するのは本人であり、自己決定を行うことが本当の自立であると判断している。このような「孝思想」意識と意思決定の区別は、若者の考えと親の希望にズレが生じた場合に葛藤の要因になっていると考えられる。

c. 男性の自立をめぐる社会的変化

男性グループでは、自立をめぐる親子関係について語る際、最も中心的に語られた内容は、就職と結婚であった。正確に言えば、経済力の獲得と、結婚生活を維持できる経済力の増大である。しかし、このような息子の就職や結婚に対する親の強い期待が韓国男性に大きなプレッシャーを与えている。次は、M2さんの語りである。

「(親が) 子どもに「なぜ自立しないの」と要求するけど、経済的な能力がないと生きていけないという雰囲気があって、…親の話を聞くと、私が果たしてこの経済状況の中で生き残れるか、家なんか買えるのか、親の話を聞くと、家を買う値段って半端じゃないし、だけど、親はなぜ自立しないのかって。…だから、自立する考えが、また、なくなってしまうのです。」(M2さん、親別居男性グループ)

M2さんは、「自立する考えがなくなる」原因として「経済的な能力がないと生きていけないという雰囲気」を上げている。前述したように、現代韓国社会では青年失業率が高く、若者層の貧困が深刻な社会問題になっている。このように、親の期待に答えることができない社会状況にあるにもかかわらず、親の期待は依然として強いため、若者は親子関係と自立の間で葛藤を感じるのである。このような葛藤には、親の期待に応えなければならぬという「孝思想」や親子「同一体」意識が影響していると考えられる。また、このような葛藤は結婚に関しても存在する。次は、M1さんの語りである。

「結婚できる条件が満たされたら結婚したと思います。…結婚した後の経済的負担に耐えられないので…(生活にかかる費用を) 自分で払う能力がないと結婚することは考えられないですね。」(M1さん、親別居男性グループ)

M1さんは、結婚への親の期待に対して、自分も「結婚できる条件が満たされたら結婚した」と語る。しかし、彼が、結婚できない理由として上げている「経済的負担」は、経済力を獲得することがなかなか難しい現在の社会経済状況に根本的な理由があると推測できる。なお、このような意識は長男の場合より強く表れると考えられる。

2) 女性の場合

女性の場合、親別居女性グループは金銭面や意識面に対する親子分離について意識していて、親同居女性グループでは親子のリレーションシップをより重視する傾向が見られた。男性が、親と同・別居するという居住状況よりは正社員・非正社員によって親子関係から経験する葛藤の内容が異なるのに対して、女性の場合、正社員・非正社員というより、親子の同・別居によって親子関係の差が見られた。

a. 「情緒的つながり」に対する親の期待

女性グループの場合、男性に比べて就職や結婚に対する親の期待からのプレッシャーよりは、親からの情緒的分離をめぐる親子関係が多く語られた。特に、親別居女性グループでは、意思決定、親子の情緒面をめぐる親からの分離がうまく行われないことに対する悩みが多く語られた。次は、F2さん、F3さんの語りである。

「(就職して) もうお金を稼ぐようになったから、自分の人生は自分のものだという考えが強くなって、親に相談しないで自分で決めてから後で(親に) 知らせるように変わったので、親がそれに対して寂しいと言います。」(F2さん、親別居女性グループ)

「私たちが家を出て母親はうつ病になって…週末に(実家に) 帰って友達に会いに出かけると(母親は) 人生が虚しいって落ち込むし…一日はずっと母親と一緒にいてあげなきゃ。」(F3さん、親別居女性グループ)

F2さん、F3さんの語りからは、子どもが自ら行う「意思決定の分離」や別居による「生活分離」に対して親の抵抗や戸惑いが伺える。親は、娘については親の権力下において、親との情緒的つながりを維持することを期待しているのではないだろうか。つまり、息子には就職や結婚といった経済面について期待し、娘には社会的・経済的な地位よりは、親子関係の中で、もしくは、親の範囲内で情緒的支えになることを期待するのであろう。

b. 親に対する「惻隠」・「憐愍」の気持ち

一方、女性グループでは、「孝思想」よりは、親(特に、母親)に対して、家族のために「犠牲」になってきたので申し訳ないという気持ちからくる思いやりの感情が多く見られた。つまり、若者は、子どもに対する親の犠牲的行為の大きさを意識していて、親に対して「惻隠」という気持ちを現していた。次は、F1さんとF3さんの語りである。

「親がどのように生きてきたか分かっているので、(親からの) 完全な自立は難しいと思います。」(F1さん、親別居女性グループ)

「母親は私たちのために、家族のために献身的に生きてきたから…親に申し訳ない気持ちがあります。」(F3さん、親別居女性グループ)

このような親の犠牲に対して若者が抱く「惻隠」な気持ちや「憐愍(哀れむこと)」の感情は、子どもの心の統制として影響力を持つ。つまり、若者が親からの自立を困難と感じる原因として作用するのではないだろうか。個別化・個性化、自律性を強調する欧米とは異なり、韓国文化では、親子間の依存と結束、緊密な紐帯関係があることを理解する必要がある。韓国の若者は、こういった親に対する「惻隠」や「憐愍」の気持ちが、親子関係において自分の気持ちや意見よりは親の期待に答えるように働いていると推測できる。

c. 女性の自立をめぐる社会的変化

女性における親子関係は、親子分離、または、親からの自立を妨げる原因の一つとして考えられる。しかし、女性グループでは、親との分離を意識したり、親の態度について疑問を持つ語りが多く見られた。次は、F5さんとF2さんの語りである。

「職場生活をしてから、私がもう親とは本当に重要なことじゃない限り、相談しなくなったことから自立していると感じます。」(F5さん、親同居女性グループ)

「もう自分で稼いでいるから…自分の人生は自分で決めるべきで、独立した存在として親を支え、(親に)助言を求めることはあっても、親が干渉をしてはいけなと思います。」(F2さん、親別居女性グループ)

F5さんとF2さんの語りの中で、親との分離を意識するようになった重要なきっかけは「経済的自立」である。F5さんは、「職場生活」を始めてから「親とは相談しなくなった」といい、F2さんの場合、「自分で稼いでいる」ことが、「自分の人生は自分で決める」ことを主張できるきっかけとなったのである。従来、女性は結婚するまでは親の権力下で生活するのが一般的であった。しかし、教育・就職機会の男女平等化によって多くの女性が社会に進出し、経済力をつけるようになったことで、女性にも親元から分離し、自立することを意識させるきっかけになったと考えられる。つまり、規範を維持している親と規範への疑問を持つ娘の間で自立をめぐる葛藤が生じているのであろう。

しかし、女性グループでは親から分離したい葛藤とともに親から分離することへの不安や、自立したくない葛藤も見られた。次は、F1さんとF3さんの語りである。

「自分で稼ぐようになると親より自分の決定権が大きくなって、自分の人生は自分のものだ(と思うけど)、しかし、情緒的自立はとても怖い。親は親、自分は自分というのが怖い…」(F1さん、親別居女性グループ)

「私は、今、自立してないし、自立するのが嫌です。怖い。そして、私が自立するのを何よりもお母さんがいやがるから、(親に)申し訳ないです。私が自立しようと思うのが、果たして私が自立できるのかという気もして…」(F3さん、親別居女性グループ)

F1さんとF3さんの語りでは、親子が分離し自立を意識しているものの、実際に自立することに対して「怖い」と表現している。つまり、女性の社会進出により女性の自立への関心は高まってきたが、社会的義務感が女性の場合は弱いため、完全に自立することには不安があるのではないだろうか。つまり、女性には、子どもとのつながりをずっと持ちたい親から自立したい気持ちと自立への不安の気持ちが共存していると推測できる。

6. まとめと考察

韓国の若者から見た親子関係と自立への葛藤を検討した結果、以下の知見が得られた。男性の場合、子どもの経済面に対する親の強い期待は子どもにプレッシャーとして作用し、「孝思想」や親子「同一体」意識は、親の希望に応えなければならない気持ちに働いていると思われる。しかし、韓国社会における社会経済状況によって若者が親の気持ちに答えることが難しくなり、若者の中では自立したくても自立できないという葛藤が生じていた。一方、女性の場合、親から情緒的つながりを求められていて、親に対する「惻隠」や「憐愍」の気持ちは親を傷つけてはいけないという意識に働いていた。しかし、女性の社会進出の拡大により、女性も就職して社会生活を経験することによって経済面、意識面、住居面で親子分離を意識するようになり、親子の意識のズレから葛藤を経験していた。

このように自立をめぐる親子関係に男女差が生じる背景には、韓国社会の自立規範におけるジェンダー格差が

上げられる。韓国社会では、今日でもなお、家の継承における男性への期待が高く、子どもの頃から男女に求められる自立の内容は異なっている。つまり、親は息子に対して経済的な期待が大きく、自ら意思決定を行う能力を求める。そのため、男性は就職による経済力の獲得や結婚への経済的負担を感じると考えられる。それに対して、娘の場合、生活の身の回りのことがきちんとできることを要求され、結婚するまでは経済力や意思決定に対して親の保護下で生活することを求められる。

現在、若者の自立における様々な問題は、社会的な問題であるより家庭内の問題として認識されている。子どものためには犠牲を惜しまない韓国の親は、就職困難の中で経済的自立ができない子どものために支援し続けていて、子どもの方は、ますます経済的に意識的に親から自立することに困難を感じている。

本研究は、性別と居住形態に分けてフォーカス・グループ・インタビューを行ったが、学歴や就労状況など別の属性によるバイアスが生じた可能性がある。さらに、グループ・インタビューからは、個人における自立意識の構築過程を引き出すことが難しく、若者が語る親の期待や親子関係であるため、実際の親の意識や親子の相互作用を確認したわけではない。おそらく、親側の語りからは、また別の側面が現れるだろう。今後は、親子の両方の語りから韓国の家族関係と若者の自立意識を分析することが課題である。

【謝辞】

本調査は、お茶の水女子大学「魅力ある大学院教育」イニシアティブ〈対話と深化〉の次世代女性リーダーの育成、平成18年度文部科学省研究拠点形成費等助成金をもって行ったものであり、この場を借りてお礼を申し上げる。尚、本論文は、2008年10月12日の第28回家族関係学セミナーでの報告を加筆修正したものである。

註

- (1) この1週間に求職活動を行った者の中で、OECDの青年失業率は15~24歳としているが、韓国の場合、徴兵制によって経済活動を始める時期が遅くなることを考慮して15~29歳まで（男女ともに）とする。
- (2) 非経済活動人口の中、就業意志と働く能力を持ち、過去1年間に求職の経験があったが、適当な仕事が見つからないか、資格（教育、技術、経験など）不足の理由で過去4週間に求職活動を行っていない者を「求職断念者」と呼ぶ。
- (3) FGIは、それぞれ大学院のゼミ室や会社の会議室、喫茶店などで約1時間程度に行った。質問内容は、自立のイメージ、自立のきっかけや自立の基準、自立をめぐる親子関係、自立をめぐる不安、自立の自己評価などわりと抽象的な質問を設定し、対象者間の活発な自由討論を行う中で具体的な内容が語られるように誘導した。インタビューはすべて韓国語で行われ、対象者の許可のもと録音された。筆者が韓国語で全文を文字起こしたうえ、分析に利用する箇所を日本語に訳した。語りのデータからの引用はすべて「斜体」にした。口語表現がそのまま語りのデータに再現されているため、欠落した表現を補い、その場合は（括弧）で囲んだ。省略は…で示し、語りの中で核心的な表現には下線を引いて示した。
- (4) FGIを始める前、基本属性に関する調査票を対象者に渡し、記入してもらった。各グループの対象者を選ぶ際、友達や会社の同僚など知り合いを中心に選択したため、グループによって属性に大きな偏りが見られた。分析と結果の解釈においては、上記の点に注意しなければならない。

参考文献

- 千年よしみ・阿部 彩 2000「フォーカス・グループ・ディスカッションの手法と課題：ケース・スタディを通じて」、国立社会保障・人口問題研究所編『人口問題研究』56(3): 56-69.
- Cho, J. J. 2005 「청년실업문제를 어떻게 볼 것인가」『대우사회비평』14(2): 15-28.
- 岩上真美 2003 「ライフコースとジェンダーで読む家族」有斐閣.
- Jones, G., & Wallace, C. 1992 "Youth Family and Citizenship" Open University Press (= [1996]2002宮本みち子監訳・鈴木宏訳『第2版 若者はなぜ大人になれないのか—家族・国家・シティズンシップ』新評論)
- 乾 彰夫 2002 「変わる若者の生活環境とライフスタイル：「戦後型青年期」の解体・再編と若者の中の困難」日本家政学会生活経営学部会編『生活経営学研究』37: 3-7.
- Kang, C. Y. & Park, K. 2001 「대학생들의 애착과 진로발달과의 관계」『한국심리학회지: 상담 및 심리치료』13(2): 51-69.

尹 韓国における若者の「自立意識」と親子関係

韓国統計庁 2006 「教育統計年報」.

韓国統計庁 2007 「2007年12月及び年間雇用動向」.

Kim, J. Y. & Lee, M. Y. 1997 「부모의 의사소통유형에 따른 청소년기 자녀의 스트레스」 『가정관 리연구』 16: 47-67.

Lee, G. H., Song, H. J., Lim, H. K., Jun, Y. K. 2004 「부모로부터의 심리적독립과 자기주장성이 진로태도성숙에 미치는 영향에 대한 남녀차이연구」 『한국심리학회지: 여성』 9(2): 53-65.

Min, K. W., Chun, S. M. & Choi, J. H. 1996 「역기능적 가족구조와 대학생의 심리적 독립」 『대학상담연구』 7(1): 107-134.

宮本みち子・岩上真珠・山田昌弘1997 『未婚化社会の親子関係：お金と愛情にみる家族のゆくえ』 有斐閣選書.

中西泰子 2004 「友達母娘のなにがわるい?—「家族の中の若者」という視点」 53-73 宮台真司編 2004 『21世紀の現実—社会学の挑戦』 ミネルヴァ書房.

Park, Y. S. & Lim, I. C. 2003 『한국인의 부모자녀관계—자기개념과 가족역할인식의 토착심리 탐구』 교육과학사.

Park, Y. S. 2007 「한국인의 가정갈등과 효도관에 관한 연구」인하대학교 박사학위논문.

武石恵美子 2002 「若年者を取り巻く雇用の現状」 日本家政学会生活経営学部会編 『生活経営学研究』 37: 15-20.

田中恒子 2002 「青年期の自立と居住状況」, 日本家政学会生活経営学部会編 『生活経営学研究』 37: 21-26.

Woo, S. H. & Park, K. I. 2007 『88만원세대—절망의 시대에 쓰는 희망의경제학』 레디앙.

山田昌弘 1999 『パラサイト・シングルの時代』 ちくま新書.

尹珍喜 2007 「成人未婚者の自立に影響を与える要因分析：韓国の場合」 日本家族社会学会編 『日本家族社会学会』 19(1): 7-17.

米村千代 2008 「ポスト青年期の親子関係意識—「良好さ」と「自立」の関係」 『人文研究』 37: 127-150.